

「底が突き抜けた」時代の歩き方 566

ポルトコフスカヤが見つめる遠くのまなざしに映しだされているもの

2002年10月23日に、チェチェン抵抗勢力がミュージカル『ノルド・オスト』の演じられていたモスクワの劇場を占拠した事件で、正体不明の化学ガスを使って治安機関が突入し、130人の人質の命が失われるという大惨事が発生してから約二年後の2004年9月1日、多国籍のテロリスト集団によって北オセチア学校占拠事件（ベスラン事件）が惹き起こされ、300人以上が死亡、700人以上が負傷したと考えられている。ポルトコフスカヤは『プーチニズム』の冒頭で、《ベスラン事件直後、政治的な締め付けはますます苛烈さを増した。プーチンはこの悲劇を国際的なテロ行為であると発表した。チェチェンとのかかわりを否定し、すべてをアルカイダのせいにした》と書き、こう記す。

《政治的に見ると、ベスラン事件はクレムリンが己の過ちをいささかなりとも分析、修正するきっかけにはならなかった。それどころか、クレムリンの政治はますます凶暴性を増した。ベスラン後、プーチンのお気に入りのスローガンは、「戦争は戦争だ」というものになった。彼のトップダウン方式の権威主義は強化されなければならない。物事の裏を一番よく知っているのはプーチンであり、プーチンが支配する限りロシアは将来テロリストの悪行から守られるのだ。クレムリンはロシア議会下院に法案を提出した。他方首長を住民の直接投票によって選出するこれまでの方法を廃止する法案だ。プーチンによれば、こうした選出方法をしているから、地方首長が無責任な行動に出るのだそうだ。ベスランの学校占拠事件の期間をとおして、臆病者や嘘つきらしい行動をし、まったくの役立たずだったのはほかならぬジャジコフ大統領やザソーホフ大統領など実質的にプーチンに任命された人たちだった。だがこの事実には一言も触れられなかった。》

（註－北オセチア学校占拠事件は起きた町の名を取ってベスラン事件とも言われる。ジャジコフ大統領はイングーシ共和国の、ザソーホフ大統領は北オセチアの、各々の大統領である。）

この新たな法案は、《イデオロギー上の洗脳作戦を伴っていた。当局は、自分たちがベスランの悲劇で非の打ちどころのない対応をしたと主張しはじめた。別の解決法はなかったし、より効果的な解決法などあり得ないというのだ。》しかし、《ベスランの人びとは自分たちが無視されているのではないかと感じはじめた。テレビは聞こえの良いニュースばかり流す。人質に差し伸べられた手、送られてきた山のようなお菓子やおもちや……。しかし忽然と姿を消した人びとがどうなったのかは調べられなかった。》ベスランの人びとがそう《感じはじめた》ことは、すでにその二年前の「ノルド・オスト」

の被害者家族がたつぷりと味わってきた実感にほかならなかった。

《ロシア伝統の40日の服喪期間が過ぎ、公式な追悼式が営まれた。家族の悲痛な思いが電波に乗ることはなかった。やがて10月26日がやってきた。モスクワの「ノルド・オスト」事件から二周年だ。(中略)

「ノルド・オスト」のあとに当局が取った唯一の行動は、彼ら自身の行動を取り繕い、自ら勲章を出して悦に入ることだった。第二次チェチェン戦争終結に向けた努力はしない代わりに、手綱は絞られた。和平案の早期実現に向けて活動する人、チェチェン危機からふたたびテロが生じるのを防ごうとする人を対象とした抹殺作戦が始まった。ロシアはチェチェンやイングーシの人びとに対する「対テロ作戦」という国家ぐるみのテロを展開している。ベスランはこれに対する予測可能な反応だった。「対テロ・テロ」という言葉は、「ノルド・オスト」とベスランの惨劇のあいだのロシア社会を明確に特徴づける。私たちは「テロ」と「対テロ」のひき臼のあいだで粉々に砕かれてしまった。テロは急激に増加していった。「ノルド・オスト」からベスランへと必然的につながる道筋は見逃しようのないほど明白だ。

2004年10月26日午前11時、ドゥブロフカ（モスクワでは第一ドゥブロフスカヤ通りをこう呼んでいる）にある劇場入口の階段で集会があった。愛する者を亡くした人、「ノルド・オスト」事件で人生を壊された人、人質になった人、事件で命を落とした人の身内や友人が集まった。ロシアのしきたりに従って、彼らは早朝に愛する者の墓を訪れた。犠牲者を追悼する集会が11時にドゥブロフカで予定されていた。「ノルド・オスト」の被害者を支援する社会団体は、集会の情報を通常の手段で広めた。追悼集会の式次第は地元のラジオで放送された。モスクワ市長の執務室と大統領府に招待状が送られ、代理人が出席すると確約が取れていた。

しかし、司祭が待つなか、時間だけがいたずらに過ぎていく。11時20分、11時30分、11時50分。もう始めなければならない。人びとがささやきはじめる。「来ないわけないわよね?」

やがて正午になった。人びとは苛立ってきた。子どもを連れた人が多い。故人の子どもたちだ。「われわれは当局に話がある。じかに訊きたいことがあって来たんだ」。怒りはさらに募った。「われわれには支援が必要だ。われわれは常に無視されている。子どもたちはもう無償の治療も受けられない」。役人の姿はまだ見えない。もう待っても意味がない。こんな遅くに登場する者などいない。犠牲者の目を見るのが恐ろしいのだろうか。「ノルド・オスト」事件の捜査は行き詰まっている。悲劇の真相、当局が使ったガスの正体は極秘のままだ。あるいは、私たちの知らない何かが起きているのだろうか。

劇場を囲む広場は警察に封鎖されていた。不測の事態が起きないように一般の若い警官たちが送り込まれていた。警官たちはためらっている。人びとの言っていることが耳に入ってくるからだ。どこかばつが悪そうだ。こうして「ノルド・オスト」の犠牲者たちは、この警官らの口から当局の代理人がすでに来て立ち去ったと知らされた。家族が

まだ墓地にいるころ、彼らは自分たちだけの快適な公式の追悼集会に出席した。彼らの行為の犠牲になった者たちとの対話を避けるためだ。午前10時、モスクワ市と大統領府の代理人たちはドゥブロフカにやって来た。主要なテレビ局すべてのカメラの前で特別な式典的一幕を演じるためだった。公式の花輪が供えられ、儀仗兵の一条乱れぬ行進が披露された。前もって用意され、こうした場にふさわしいと上層部にお墨付きをもらった追悼の弁が述べられた。どの部分を取っても立派な集会だった。涙も大仰な悲嘆もない。10月26日夜、都合の良いところだけを集めた茶番劇がテレビ各局で繰り返し放映された。ロシア国民は安心している。当局はこの悲劇的事件をきちんと覚えているし、誰が見ても正当なことをしているのだ。事件に対するロシアの記憶の公式映像はわずか数分にまとめられた。

もちろん、千人を超える友人や親類、元人質、たくさんの外国のジャーナリストは死者に哀悼の意を表した。入口の階段にロウソクが灯された。ガスに巻かれた人が瀕死で横たわり、治療も受けぬまま息絶えた場所だ。130人の死者の写真が、美しく並べられたロウソクの揺らめく炎に照らされている。雨が降っていた。ちょうど二年前と同じように。雨は私たちの涙と混じり合った。ちょうど二年前と同じように……。

しかし、雨はイデオロギーのシニシズムが生んだ苦しみを洗い流してはくれなかった。現代史において、国民の悲劇——それも罪のない犠牲者の血で贖われているのだ——に対してこれほどあからさまに国家イデオロギーを見せつけられた例はない。国民に対する権力の憎しみはとどめを知らない。その憎しみとは私たちに対する恐怖の裏返しだ。彼らは私たちの悲しみと向き合えない。己の欠点を認め、数多くのテロによって落命した多くの犠牲者に対する責任を認めることができない。テロに対する効果的な戦略さえ持ち合わせていない。》

国民がいて国家があるのではない。国家があつて国民が生みだされてくるのである。国民が国家に先行することはない。国家は国家自身によって支えられるのではなく、国民によってこそ支えられるからだ。したがって、国民は国民であることをやめてただの人民に戻ることはできるけれども、国家が国家であることをやめるなら、もはや国家はなくなってしまう以外の途はない。烏合の衆は国家によって国民へと組織されていくな、つまり、国家は国民を生み落としていくな、そして国民によって国家が支えられていくな、国家は自体を守るためにも国民を安全に保護することを最大の責務としなければならない。それは近代国家にとって必要不可欠な与件である。ところが、プーチン政権が掌握する国家イデオロギーは、《国民に対する権力の憎しみはとどめを知らない》というかたちをとってあらわれてくる。それは、ロシア国家がまだ近代国家たりえないことの不安を露呈しているといえる。要するに、ロシア国家が自体に対する不安を《国民に対する権力の憎しみ》として、どうしても表出せざるをえなくなっているのだ。

もちろん、《国民に対する権力の憎しみ》は国民に対する権力の敵意にほかならない。だから、《その憎しみとは私たちに対する恐怖の裏返し》である。しかし、国家が国民

に対して憎悪を募らせるなら、国民のほうも当然国家に対して憎悪を募らせずにはおかなくなる。「ノルド・オスト」やベスラン事件の被害者家族は、事件を通じてプーチンの冷酷な仕打ちに身をもって直面し、《国民に対する権力の憎しみ》を浴びつつあるが、他の国民はそのような仕打ちを我が身のこととして受けとめないの、《国民に対する権力の憎しみ》を直接的に浴びることはない。だからまだプーチンは安心してられるし、《権力の憎しみ》を直接的には浴びていない大半の国民に対して《ロシア国民は安心していい》というポーズを振り撒くことができる。《当局はこの悲劇的事件をきちんと覚えているし、誰が見ても正当なことをしているのだ》と、うそぶくこともできる。《しかし残念なことに、これこそベスランの犠牲者を待ちかまえている未来そのものなのだ》と、「ノルド・オスト」の犠牲者に対するプーチンの手酷い仕打ちについて記述しながら、ポルトコフスカヤは続ける。

《悲劇の公式説明は非公式なものとはあまりにも隔たったものになる。果てしなく流れる涙など存在してはならない。そして、真相が洩れてくることはない。そこに集まった人が口にしたいことを聞こうという人はいない。公開する情報を決めるのは当局だ。ソビエト時代同様、人びとの自然な感情は望まれていない。9月1日の悲劇から当局が取ってきたイデオロギー上の立場によれば、当局の無能（まったくもって無能だった）を証すものは何であれ許されない。涙は見せていい。ただそれにも限度がある。すべてはうまく運んでいるのではないか。悲劇を忘れ去ってはならないが、絶望しているかのような様子を過度に見せることは許されない。ソビエトの地に絶望があってはならぬ。なぜならば、プーチンが私たちを見守ってくれており、物事がどうあるべきか一番よく知っているからだ。トンネルの終わりには光が見える。私たちはみな国際テロに対する戦争を戦っているのだ。そして何よりもこれまでになく団結している。

10月29日、ロシア議会下院は圧倒的多数の賛成でプーチンの新法を通過させた。新法の下では、プーチンが地方首長を指名し、地方議会は指名された唯一の人物を承認する。もし地元の議会が不遜にも二度にわたってプーチンの指名を拒否するようなことがあれば、抵抗する議会は不信任動議を通過させたものとして、そう、やはりプーチンの大統領令により解散される。

もちろん、これは憲法をないがしろにする行為であり、ロシア国民を完璧に愚弄したやり方だ。ところが、ロシア国民は事態をほとんど静観していた。野党は何度か会合を持つには持った。しかし、それは全国的規模にはならず、誰も注目しようとしなかった。プーチンは自分のやり方を押し通した。ポスト・ベスランのソビエト流ロシアの誕生だ。》

国家が成熟していなければ国民も成熟しない。ポルトコフスカヤが、《憲法もないがしろに》して《自分のやり方を押し通》すプーチンの新法と、そんな《ロシア国民を完璧に愚弄したやり方》に対して《ほとんど静観》するロシア国民を浮き彫りにするとき、ソビエト時代がいままた甦ってきたというより、ソビエト時代がそのまま続いているとみたほうがよい。ロシアがもう一度大国になるには、プーチンぐらいの強引な手法をも

たなければ、この混沌とした世界情勢を乗り切ることができない、とたぶんロシア国民に思われているのだ。ソビエト時代を耐え抜いてきた国民であれば、このプーチン時代を耐え抜くのにさほどの苦勞はいらないということなのだろうか。《国際テロに対する戦争を戦》うために、ロシア国民は《これまでになく団結している》として、そこにはなによりも国民同士の「団結」が根本的に欠損しているといわなくてはならない。国民同士の「団結」が深く欠損しているありようについて、彼女は報告する。

《さてベスランのあとの状況はどうだろうか。「党と人民はひとつ」とソビエトのスローガンにはある。現実には日ごとに裂け目が広がっている。だがテレビ映像はこれとは対照的な印象を与えている。ソビエト式の官僚主義が戻りつつあり、より強力になっている。かつての政治の冬の再来だ。ここでは雪解けの徴候は見られない。ロシアは「ノルド・オスト」の結末に関する当局のまやかしを鵜呑みにしてしまった。そして今はベスランの惨劇に対して正義も客観的な捜査も要求していない。「ノルド・オスト」から二年というもの、たいていの国民はぐうぐう眠りこけていた。ディスコに踊りに行った。時折ほんのわずかなあいだだけ目を覚まして選挙に姿を現し、プーチンに投票した。異論もあるが、ベスラン事件を許してしまったのは私たち自身だ。「ノルド・オスト」事件後の私たちの無関心、犠牲者の苦難に対する私たちの冷淡さが運命を決めた。当局は見抜いたのだ。私たちがうっかり当局の口車に乗ってしまったことを、ベスラン事件につながった自己満足にまた退行してしまったことを。

私たちは、政治の冬がロシアにまた数十年居座るのを傍観しているわけにはいかない。私たちは自由でいたい。子どもたちには自由でいてほしいし、孫たちには自由な世界に生まれてほしい。だから私たちは近い将来、雪解けが訪れるのを心の底から待ち望んでいる。しかし、ロシアの政治情勢を変えられるのは私たち自身しかいない。ゴルバチョフのときのようにクレムリンからまた雪解けが来るだろう、と現時点で期待するのは愚かで、非現実的だ。それに西側も助けてはくれない。プーチンの「対テロ」政策に対する彼らの反応は鈍い。今日のロシア情勢は彼らにとって都合がいい。ウオッカ、キャビア、天然ガス、石油、熊、そして特殊な人たち……。エキゾチックなロシア市場は西側が考えたとおりのものとして落ち着いている。世界もヨーロッパも陸地のほぼ七分の一を占める国に対してこれ以外のことを望んでいない。

外側から聞こえてくるのは「アルカイダ、アルカイダ」というお粗末な呪文、ただただ眠りこけていたいと望む社会を眠らせるもっとも単純でわかりやすい呪文だ。これさえ唱えておけば、これから起きるであろう、あらゆる血の惨劇の責任は取らずにすむのだ。》

結局のところ、プーチンは《ぐうぐう眠りこけてい》る多くのロシア国民に神輿みこしを担がれて、当然のようにして登場したということだ。プーチンの登場をロシア国民が願ったとき、チェチェン戦争も不可避になり、「ノルド・オスト」事件が惹き起こされたのも必然であった。《ベスラン事件を許してしまったのは私たち自身だ。「ノルド・オスト」

事件後の私たちの無関心、犠牲者の苦難に対する私たちの冷淡さが運命を決めた。》更に、ポリトコフスカヤが殺されることになったのも、《ベスラン事件を許してしまった》ロシア国民であり、「ノルド・オスト」事件後のロシア国民の《無関心、犠牲者の苦難に対する》ロシア国民の《冷淡さが運命を決めた》と付け加えないわけにはいかない。彼女はプーチンを支持する眠りこけるロシア国民に対して容赦なかった。もちろん、それは目覚めることを願っていたからだ。だが気持ちよく眠りこけている国民は彼女の声をうるさいと追い払おうとしただろうし、彼女はそのような国民に殺されたのだとつくづく思われる。

彼女が所属していたノーヴァヤ・ガゼータ副編集長ヴィタリ・ヤロシェフスキーはインタビュー（通信563号掲載）に、「ロシアにはつねに二つの社会があります。ひとつはアンナの葬儀に参列した人々の社会。私たちのところには、ロシア全土から哀悼のメッセージが届けられました」、もう一つは「国民の大半は無関心」という社会であり、「ロシアには市民社会などありません。ご存知でしょう？ ロシアには同情心や団結心はないのです。チェチェン戦争は1994年から続いています、本当に大きなデモが起こったことなど一度も思い出せません。ベスラン事件の後で、人々が事件について語っている、そんな状況を思い出すこともできません。赤の広場で私たちが集会を主催したときも、ようやく200人が集まったという状況でした。私もその場にいました。すると、こんな会話が聞こえてきたのです。『参加しないと給料を下げると言われたから来たんだよね』『私は参加したら休暇が3日延長されるって言われたね』と答えている。

紛れもなくポリトコフスカヤは、「ノルド・オスト」事件やベスラン事件に無関心な、したがって彼女の暗殺にも無関心なロシア国民によって殺されたのである。このロシア国民の無関心はいうまでもなく、加速しつつある世界中の人々の無関心にもつながっているが、06年10月10日のラジオ・リバティでアンドレイ・バビーツキは、彼女の死を歓喜する声があったことを取り上げている。（通信563号掲載）

《アンナ・ポリトコフスカヤの悲劇的な死についてインターネット上で繰り返されている議論を読むと、人間の醜悪性はもはや限りなく根深くなっていることが、まざまざと感じられます。

熱狂的な「愛国主義者」などではないごく普通の何千人もの人々が、良心の呵責を感じずに人の不幸を喜ぶ言葉を投げつける様相は、かつてこの国で「人民の敵」が抹消されていくことをソヴィエト市民が純粋に歓喜し、ヴィシンスキーに倣い「犬に対する犬死」の言葉を繰り返していた時代と、いまの時代はさほど隔たりがないことを顕著に示しています。

もしかするとこれは単に、憎悪が国民の義務として評価される国へと状況が舞い戻っただけなのかもしれません。》

《従って公開処刑という形をとるような強制的な死に、アーニャの命は相応しくないと思われていたのです。

しかしインターネットフォーラムの中で、良心と分別を喚起する一部の声が時折遮ることはあっても、大半の一般市民から上げられる歓喜の歓声を耳にした今、私は自分が間違っていたことに気づきました。そこではこの二日間で夥しい血の河が流れました。それもアーニャの血だけではありません。そこでは具体的な人々に対して新たな判決が行われ、余興を続けたいという執拗な願いの声が響いているのです。

自分の真実を持ち続けていただけの人間、そのような女性に下された臆病な殺人について民衆が狂喜する国では、死に該当する根拠は数多く存在していたのです。

誰が殺したのか？ 答えはきわめて簡単です。あなた方も殺したのです。他人の死を願うあなたたちの意思や希望を、そのうちの誰かひとりが体現したのです。この「誰か一人」が、みなさんの抱く憎しみの道具となったのです。この次もあなたたちは他の標的を見つけ、その周りでみなさんの感情が凝縮されていくことでしょう。名前を持たない「誰か一人」（どこから、誰によって送られてくるのか重要ではありません）は、みなさんによって養成され、任命地点に移されることで、殺人の武器という役割を演じる者として再来するのです。そしてあなたたちはみな、自分を幸せだとまた感じるができるのです。

けれども、みなさんが抱く憎しみは自分のものだという望みで自分を慰めないで下さい。これは、憎悪を育て上げて様々な方向へ送り出すことができる人々の所有物なのです。彼ら、すなわち強大な力と権力を有する人々にとって、あなた方というのは、愛することは強制されてもできないのに、憎むことはいとも簡単に覚えさせられるように浅はかで、虚偽や暴力には従順に従う群れなのです。》

ロシア国民は一体、誰を殺したのか？ 彼らは自分たちの心の奥底に深く沈んでいる「ポリトコフスカヤ」を殺したのだ。つまり、良心や誠実さ、愛、正義、希望などのありとあらゆる「未来への祈り」を殺したのだ。彼らが代わりに積極的に選び択ったものは、憎悪にほかならなかった。自分を拘束し、他人を拘束する憎悪、自分も他人も破滅へと突き落とすしかない憎悪を固く握りしめたのだ。もちろん、彼らは「ポリトコフスカヤ」を殺すことによって、未知のもう一人の自分を殺したのである。ポリトコフスカヤはだからこそ、ロシア国民の内に巣くっている憎悪、虚偽、無関心、暴力とたたかい、そのような彼らの権力意思として体現されているプーチニズムと果敢にたたかいつづけて、凶弾に倒れたのだ。あなたがたは一体、誰を殺したのか？ この自問に出会わないかぎり、ロシア国民は当然のこと、私たち世界中の人間は未来のどこへも赴けないだろう。

ポリトコフスカヤの『プーチニズム』と対話しながら、彼女のジャーナリズム活動を追っていく予定であったが、その気力はすっかり失せてしまった。居心地よく安楽に座っている場所から立ち上がりさえすれば、誰でも彼女の著作を手にすることができるのだから、読者はそうすればよい。代わりに『プーチニズム』から、彼女の多くの絶望とかすかな希望が入り混ざった苛烈な〈肉声〉をけっして忘れないように書き刻んでおきたい。

《それにしても、私たち人間は何と無神経で思いやりに欠け、無関心で、倫理にもとる

畜生になり下がってしまったのか。》(P.37)

《無神経で無関心でいたほうが人生はずっと楽になる。》(P.38)

《無関心にならないということは、実に面倒なことでもある。私にとってそれは、「党と政府の一般方針」が実際にどう実践されるのか、細部に到るまで見届けることを意味する。》(P.39)

《ロシア軍にもロシア国内にも残虐で過激な行為がはびこっているが、その責めはすべてプーチンに帰する。残虐行為はたやすく伝染する。まるで悪疫のように。当初チェチェンの人びとに向けられていたその矛先は、今では愛国心を意識して「わが国の」と表現される側に対しても向けられるようになった。この人びとの中には、最初にこうした残虐な行為に苦しんだチェチェンの人びとと、愛国心ゆえに刃を交えざるを得なかったロシア人も含まれている。そんなはずはないと思えるのはよほど単純な人だけだ。》

(P.42-43)

《私が問いたいのは国民がプーチン体制に満足しているのかどうかということだ。私はこの点こそ国家指導者の資質を決める重要なものさしだと思っている。これに対する答えを求めて、私は「ロシア兵の母委員会」へ足を運び、女性たちに尋ねる。「あなたがたの息子さんは軍に入隊して幸せでしたか？ 彼らは入隊して一人前の男に成長しましたか？」と。私は返ってくる答えから実に多くを学ぶ。

物事を見るには、全体像より細部が大切だ。少なくとも、私にはそう思える。》(P.49-50)

《ロシア軍は常に国家の根幹をなす柱だった。だがそこは、今も昔もまさに有刺鉄線に囲まれた強制収容所そのものだ。ここでは、若者たちは裁判もなく投獄され、将校たちが気まぐれに決めた刑務所並みの規則がまかり通る。ロシア軍の教育の基本的な方法は、「肥溜めにぶち込んで徹底的にやる」ことだ。ちなみにこの言葉を初めて公の場で使ったのはプーチンだ。クレムリンの頂点に立ったとき、ロシア国内の敵について、大統領はこのとおりの言葉を使った。》(P.56)

《私たちは今どこにいるのだろうか。かつて私たちは旧ソ連に暮らしていた。たいいていの人には安定した職業と当てにできる給料があった。どんな明日になるのか確信があった。病気を治してくれる医師も、物を教えてくれる教師もいた。どれにも1コペイカ(100分の1ルーブル)も払わずにすんだ。いったい私たちはどうなってしまったのか。どんな役割を割り当てられたのか。

ソビエト時代が終わって三つの変化があった。第一に、ソ連崩壊後のボリス・エリツィン統治下で、私たちは個人レベルの革命を経験した(もちろん同時に社会全体レベルの革命も経験している)。ありとあらゆるものが一瞬のうちに姿を消した。ソビエトのイデオロギー、安いソーセージ、お金。クレムリンに親玉がいるという安心感。たとえ暴君でも、この親玉は少なくとも私たちの面倒を見てくれた。

第二の変化は1998年に起きた債務不履行問題だ(ロシア政府は対外債務の凍結、ルーブルの大幅切り下げを発表。IMF融資は停止され、多くの銀行が取り引き停止に追い込まれるなど金融危

機に陥った。)これより7年前の91年、事実上の市場経済が導入された。多くの人が大金を手にし、中流階級が生まれはじめた。もちろんロシアの中流階級だ。西側の中流階級とは比べるべくもない。それでも民主主義と自由市場を支える存在だった。ところが、こうしたものすべてが一夜にして消え去ったのだ。そのころには、私たちの大半はもう毎日をどう生き延びるかに必死で疲れ果てていた。新たな試練に立ち向かう気力はなく、ただどん底へ転がり落ちていった。

第三の変化は、ロシア第二代大統領のプーチン政権下で起きた。このときロシアの資本主義は明らかにネオソビエト的な新たな段階を迎えた。経済は自由市場や教条主義、その他もろもろの要素が奇妙に混じり合ったものになった。この経済モデルでは、多くの自由な巨大資本とそれに仕える典型的なソビエトのイデオロギーが存在し、貧乏どころか極貧の人びとが大量に生まれた。その昔私たちが慣れ親しんでいたある現象、ノメンクラトゥーラ特権官僚が甦った——支配層のエリート、ソビエト体制下に栄えた高級官僚だ。経済体制は変わったかもしれない。しかしエリートたちはそれに適応した。特権官僚として「ニューロシアン」(ソ連崩壊後に富と権力を急速に手に入れた成金)と呼ばれる企業エリートのような優雅な生活を送りたい。ただ特権官僚の本来の収入は少ない。彼らは昔の経済体制を望んでいるわけではないが、新体制にも満足していない。問題は新体制が法と秩序を重んじていることだ。ロシア社会は乳を欲しがる赤子のように法と秩序を望んでいる。そんな状況下で金持ちになるため、特権官僚は法と秩序から巧みに逃れることに集中した。

この結果、プーチン政権下の古くて新しい特権官僚は、共産党政権下やエリツィン政権下ではあり得なかったほど贈収賄で汚職にまみれた。彼らは中小企業を呑み込み、ついでに中流階級をも呑み込もうとしている。また巨大企業や超巨大企業、独占企業、似非国有企業を肥え太らせている(ロシアでこれが何を意味するかと言えば、これらの企業から賄賂が得られるということだ)。こうした企業は所有者(資本家)や経営者だけではなく、政権内の支援者にも安定して最高の見返りを与えることができる。ロシアには政権内に支援者あるいは後見人のいない巨大企業は存在しない。こうした職権濫用は市場経済とは縁がない。プーチンはいわゆる「元××」、つまりソ連の指導部の職を経験してきた人たちを自分の旗の下に集めようとしている。彼らが昔を懐かしがるあまり、プーチンの資本主義はブレジネフの「停滞期」——1970年代後半から80年代前半の旧ソ連的思考——をますます彷彿とさせるものになった。》(P.60-62)

《私の目の前にいるのは国家によって訓練されたプロの殺し屋だった。今、彼のような人はたくさんいる。国は人びとをまた新たな戦争に送り込む。彼らは戦争の最中で何年も生き延びて戻ってくるが、法と秩序に守られた平和な暮らしがどういふものかを知らない。行き着く先は酒に溺れ、ギャングになり、殺し屋となって雇われる。彼らの新しい主人は彼らに大金を与え命じる。国益のためにある人物を殺せ、と。

国家は？ 何もしない。プーチン政権下では、国家は戦争から戻ってきた将校たちの面倒は見ない。国家は、ギャングの世界に、なるべく多くの高度に訓練されたプロの殺

し屋が存在するように積極的に仕向けていることになる。》(P.96)

《どうしても言うておく必要があるのは、表面的にはロシアではすべてがうまくいっているように見えるし、恐ろしいほど民主的に映るということだ。完全に独立した司法が謳われ、司法妨害は罪とされている。「判事の身分」を定めるロシア連邦法は進歩的で、建前としては司法の独立を擁護している。しかし現実には、これらの憲法や民主的原理はシニカルな侮辱を受けている、法は無法の前にあまりにも無力だ、国民が受けられる司法のサービスは国民の属する階級によって決められる。社会上層部、つまりVIPの身分はマフィアや新興財閥が占めてしまっている。

VIPでない人間はどうなるのだろう。いや、持たざる者にはもともと司法などないということだ。》(P.160-161)

《わが国のある作家が書いたように、私たちはこの人たちから釘をつくるべきだ(ニコライ・チーホノフはボリシェヴィキを賞賛して「この人たちから釘をつくるべきだ。世界に彼らより強い釘はないだろう」と書いた)。

本当に不思議だ。共産党が倒れてもうずいぶんになると言うのに、昔の習慣がまだそのまま残っている。なかでも根強いのは、人間の尊厳を病的なほどに顧みない習性だ。とりわけあらゆる障害にもかかわらずわが身を捨てて忠実に働く人、自分の仕事の大義名分を心の底から愛している人がなおざりにされている。国のために誠実に働く人に感謝することを政府は学んでいない。一生懸命働いているか。そうか、よろしい。そのまま続けよ、くたばるまで、心が壊れるまで。当局は日増しに厚顔無恥になっている。国民の中でももっとも優秀な者の心を粉々に打ち砕く。

狂信者のひたむきさで、彼らは最悪な連中に金を賭ける。

ロシアにとって共産主義が貧乏くじだったのはたしかだが、現在はそれよりひどい。》(P.180)

《私には彼らがふたつのものを区別しているのがわかった、彼らが仕える「母国」と、彼らと対立関係にある「モスクワ」だ。彼らにとってロシアとその首都とはまったく別のものなのだ。

将校たちは率直だ。カムチャツカから見れば、軍の上層部がしていることでまともなことなど何ひとつない。どうして国防省は原子力潜水艦隊の整備費を頑なに割り当てようとしないのか。地元の資源を使って整備するのは不可能だし、禁止されてもいるのは彼らにも十分わかっているはずだ。どうして上層部はまだ竣工から10年から15年しか経っていない、まだ使用に堪える艦船を無情にも廃棄処分にするのか。どうして上層部は国を挙げて築き上げてきた核の盾を着々と穴だらけにするのか。しかも、中国の原子力潜水艦がうようよとロシア沖を窺っているこの危急存亡の折に。》(P.182)

《ペチェルニコヴァをはじめとする精神科医たちは、他人に頼らずに自分の頭で考えるということがすなわち精神病だと考えているのです。》(P.275)

《歴史の悪夢はまるで腫瘍のように再発を繰り返す、これに対する治療法はひとつしか

ない。恐ろしい癌細胞をいちはやく破壊することだ。私たちはこれに失敗している。私たちは旧ソ連から逃れたにもかかわらず、ソビエト時代のナンキンムシが巣くう「新しいロシア」にふたたび自ら身を投じたのだ。》(P.282)

《ロシアは今、アメリカがベトナム戦争末期に直面したのと同じ問題を抱えている。つまり、毎日のようにチェチェンで人を殺し、盗みを働き、拷問し、強姦している連中をどう考えるのかという問題だ。彼らは戦争犯罪人だろうか。それとも、国際テロにあらゆる手段をもって敢然と挑む意志強固な戦士なのだろうか。人類を救おうという崇高な目的の前にはいかなる手段も正当化されるのだろうか。この戦争に懸けられたイデオロギーはそれほど大切なものであり、それ以外のことには目をつぶるべきなのだろうか。

西側の人ならば誰でもこれらの質問には簡単に答えられると私は期待している。つまり、それは裁判所が決めるべき問題なのだ。しかしながら、ロシアはこの間に答えを持たない。第二次チェチェン戦争に突入して5年、百万人を超える兵士や将校がこの犯罪に手を染めてきた。自国の領土内の戦争に毒され、これらの犯罪者は市民生活に重大な影響を与えている。彼らはもはや社会の中で無視できない存在になった。》(P.298)

《あるチェチェン人一家には3人の娘があった。ひとりには音楽学校の試験に合格して入学したが、残りのふたりは合格しなかった。両親は入学を果たした娘を指導する教師に残りの姉妹のピアノレッスンを依頼した。教師は依頼を断った。音楽学校の校長は校内の活動を知り抜いており、レッスンを続けることを許さなかった。そういう命令を文化局から受けたのだという。もしその教師がレッスンを続けるならば、治安当局が彼女を放ってはおかないだろうというのだ。

ということは私たち、ロシア国民がやっているのは？ 私たちの大半は国家のよそ者恐怖症に同調し、こうした対テロ政策に抵抗しようともしないのだ。それはなぜか。政府のプロパガンダがきわめて効果的だからだ。プーチンは一部の人間の所業に対して民族全体が責任を負うべきだと信じている。そしてロシア人の多数派はこのプーチンの考えをもっともだと思う。

しかし、わからないことがある。もう何年も続く戦争にもかかわらず、テロ行為にもかかわらず、大惨事や難民の波にもかかわらず、当局がチェチェン人から何をしようとしているのか。それが誰にもわからない。彼らはチェチェン人が連邦内に留まることを期待しているのだろうか。それとも、そうではないのか。》(P.355-356)

《ファシストがデンマークに侵攻したとき、すべてのユダヤ人は着ているものに黄色い星のワッペンを縫い付けるように命令された。そうすれば、すぐに見分けがつくからだ。するとデンマークの市民は誰もがただちに黄色い星を縫い付けた。ユダヤ人を救い、自分たちもファシストにならないために、国王も国民の行動を支持した。

しかし今日のモスクワの状況はこれとは正反対だ。当局が私たちの隣人であるチェチェン人を虐待したとき、私たちは彼らを助けるために黄色い星を縫い付けはしなかった。あろうことか、私たちはこれとはまるで逆のことをした。》(P.360) 2006年11月24日記